

紹介図書館	キャッチコピー	書名	著者名	出版社	推薦文
1 伏中	12月12日は【十二国記の日】	『風の万里 黎明の空上』（『十二国記』4-1）シリーズ既刊13巻	小野 不由美／著	新潮文庫	『十二国記』それは麒麟に選ばれし十二人の王が十二国を統べる、壮大な世界観のファンタジー小説です。巻ごとに異なる時代背景で語られ主人公は一人ではありません。お薦めは「風の万里 黎明の空」～終章～のなかで、現代の女子高生が課せられた苦難を乗り越え、別世界で王となり初勅を下す場面です。心に響く珠玉の名言が物語を彩ります。2018年【十二国記の日】待望の新作刊行情報が発信され、いままさに話題の長編です。
2 吉祥院	妹の憧れは、お姉ちゃん。	『ポニーテール』	重松 清／著	新潮社	大好きなお父さんに、優しい新しいお母さん。そして、クールでカッコいいはじめてのお姉ちゃん。妹のフミちゃんは、新しい家族関係にも小学校の新生活にも一生懸命。お父さんとお母さんも、もちろん一生懸命。だけど、お姉ちゃんだけはどうしてもよく分からない……？お互いが頑張って、頑張りすぎるとその分ちょっとずつ空回っちゃう。フミちゃん家族の日々。
3 みらい	革命の音楽を聴け！	『革命前夜』	須賀 しのぶ／著	文藝春秋	昭和が平成に変わった時、ピアニストの眞山柊史（まやま・しゅうじ）は東ドイツのドレスデンにある音楽学校に留学する。そこで彼は、口が悪い天才肌のヴァイオリニストや、多くの音楽家たちに出会う…。と、書くと音楽小説のように思えるが、この本はそれだけではない。ベルリンの壁に隔てられた東西ドイツを、日本人の眞山視点で描いた歴史小説でもある。さらにミステリー要素も加わり、盛りだくさん一冊となっている。
4 西京	時代を超えた長旅に出ませんか	『背教者ユリアヌス』全4巻	辻 邦生／著	中公文庫	短い生涯を駆け抜け、ローマ皇帝になった男の一代記である。時代も場所も人種も違うが、そこに描かれた「人間」たちの魅力に惹きつけられ、波乱万丈の出来事に4巻通じて心揺さぶられる。「背教者」たるゆえんは現代の宗教問題にも通じる。国を統べることや国をなす一人一人の矜持についても考えが向かう。この小説を読むことは上等な長旅に出ることに似ている。帰宅後の人は、出発前とはきっと違うことだろう。
5 左京	みよ、それでもせいかいはうつくしい	『千日の瑠璃《究極版》』上下2巻	丸山 健二／著	求龍堂	「私は○だ」で始まり「×月×日×曜日」で閉じる見開き2頁の短い物語の一千日。「私」は、風であり鳥籠であり、噂や悪夢などの現象であり。一人の少年を取り巻く愛おしい毎日が、小さな雫となり滴り、雫は集まり細い流れとなり、流れは集まり川となり、やがて壮大な物語の海が出現するという、美しいうつくしい一冊です。
6 右中	すべては一頭の羊からはじまる	『羊をめぐる冒険』上下2巻	村上 春樹／著	講談社文庫	「僕」の元に友人から手紙が届く。同封された写真にはこの世に存在しないはずの謎の羊が写っていた。「僕」は写真を頼りに羊をめぐる冒険を始める。様々な人と出会いながら羊を探す「僕」。そして冒険の終りに「僕」を待ち受けるものとは一。今や世界的に有名となった村上春樹が小説家として生きて決めてから最初に書いた小説であり、自分にとって新たな「冒険」だったと語る本作。上下巻共にぜひ手にとってみてください。

紹介図書館	キャッチコピー	書名	著者名	出版社	推薦文
7 東山	温かな気持ちか、 奇跡を起こす	『桜風堂ものがたり』シリーズ既刊2巻	村山 早紀／著	PHP研究所	銀河堂書店に勤める青年、月原一整（つきはら・いっせい）は、埋もれていた名作を探してきて光を当てるケースが多く、店長から「宝探しの月原」と呼ばれ、信頼されていた。しかしある日、店内で起こった万引き事件がきっかけで、長年勤めた書店を辞めることになる。傷心を抱えて旅に出た一整は、ネット上で親しくしていた、桜風堂という書店の店主を訪ねる。店主や元同僚、作家や女優のさまざまな思いが、一冊の本に奇跡を起こす心温まる物語です。
8 南	真の度量の大きさを 教えてくれる	『沈まぬ太陽』全5巻	山崎 豊子／著	新潮社	決してハッピーエンドで終わらない。だが、著者の綿密な取材、ストーリーの壮大さに心を驚掴みされる。組合の委員長に担ぎ上げられた主人公は、会社側からの凄まじい嫌がらせを受け、左遷、それも最僻地のナイロビに飛ばされたり、閑職に就かされたり。それを、10年、20年と真摯にこなしていく逞しさ。特に御巢鷹山で起きたジャンボ機墜落事故での遺族への対応等で光る誠実さ。経営陣の腐敗にまで迫っていくのだが…はてさて。
9 深草	いつかどこかの現実？	『百年法』上下2巻	山田 宗樹／著	角川書店	不老不死が実現した日本には法律がある。百年法—不老処理を受けた国民は100年後死ななければならない…。2048年、最初の死が執行される時、人は何を思い、どう行動するのか。様々な立場から語られ進められていくストーリーに、自分なら…と考えながらも、臨場感あふれる展開にどんどん読み進めてしまう作品です。
10 山科	「お前は良い漢だ」	『沙門空海唐の国にて鬼と宴す』全4巻	夢枕 獏／著	徳間書店	平安初期の僧である空海は、遣唐使の留学僧として唐へ渡ります。その時一緒だった橘逸勢（たちばなのはやなり）と、首都・長安を揺るがす巨大な謎にせまっていきます。まるで諺のようなこの本のタイトルをいつのまにか口ずさむようになったら、空海（または作者）の術にはまったのかも。空海が橘逸勢に言った「お前は良い漢だ」を聞くと、同じ作者の別シリーズを思い出す人もいるかもしれません。
11 中央	一度読んで二度味わう物語	『わたしの本当の子どもたち』	ジョー・ウォルトン／著 茂木 健／訳	創元SF文庫	〈今日も混乱〉—彼女の介護記録に記入されるお馴染みの単語だ。その理由は認知症であること、だけではない。彼女は「自分はふたつの世界を生きていて、そのあいだを知らないうちに行き来しているのではないか」と考えたのだった。ひとつの選択がもたらしたふたつの人生とは？人生について、私たちを取り巻く世界について、ゆっくり考えたい本…不思議な読後感をぜひ味わってください。
12 北	今いる世界は、どこだ？	『シャムロック・ティー』	キアラン・カーソン／著 栩木 伸明／訳	東京創元社	読み始めた時、一体何の話なのか、まったく分からなかった。読み進めると、時間も場所も異なるいろんな話が混ざり合い、もっと混乱した。色の名前が並ぶ目次、聖人たちの逸話、ファン・エイクの絵画、そして「ぼく」が体験したこと…。しかし、その分からなさを辛抱し、読み続け、終わりまで行き着くと、「なるほど！そういうことだったのか！」とやっと理解できる。その瞬間が、たまらなく気持ちよい。

紹介図書館	キャッチコピー	書名	著者名	出版社	推薦文
13 洛西	どんな苦難も想像力で乗越える	『小公女』	フランシス・ホジソン・バーネット／作 高楼 方子／訳 エセル・フランクリン・ベッツ／画	福音館書店	昔読んだ『小公女』は、苛められるセーラが可愛そうで、読むのが辛かった。今読み直してみると、どんな場所においてもセーラがセーラである事の力強さが感じられた。困難なことから抜け出すためには、想像力を豊かにすること、生活力をつけることが必要で、どんなに現実が厳しくとも目をそらさず立ち向かっていく信念に支えられてセーラは幸せな時間を取り戻した。130年も前に書かれた作品ですが、この精神は今必要な気がします。
14 久世	マーリンの冒険はここから始まる	『マーリン』シリーズ全5巻	T.A.バロン／著 海後 礼子／訳	主婦の友社	嵐の日、海岸に流れ着いた少年は、名前も記憶も失っていました。母を名乗る女性と暮らすも、少年は自分を探す旅に出ます。そして辿り着いたのは、魔法の島フィンカイラでした。「アーサー王伝説」にも登場する、世界的に有名な魔術師マーリン。この小説は、マーリンの語られなかった子供時代を綴ったファンタジー小説です。何もかも失った少年は、どのようにして偉大な魔術師へと成長するのでしょうか。シリーズ全5巻。
15 醍醐	泣きながらそれでも前に進もう！	『風と共に去りぬ』全5巻	マーガレット・ミッチェル／著 大久保 康雄／訳 竹内 道之助／訳	新潮文庫	アメリカ南部大農園の娘スカーレット・オハラは、従姉妹のメラニーを思うアシュレーに告白したが振られてしまいその場面をレット・バトラーに見られる。その後、腹いせにメラニーの兄と結婚するが南北戦争が始まり、夫は戦死し戦後故郷は高い税金を課せられ二度目の結婚をするも、再び夫が亡くなり彼女は好きではないレット・バトラーと三度目の結婚をする。気性の激しいスカーレットとレット・バトラーの結婚生活は果して…。
16 醍中	死ぬまでもがき続ける芸術家	『月と六ペンス』	モーム／著 中野 好夫／訳	新潮文庫	「描かねばならない」その思いは彼を突き動かし、生涯に亘り苦しめる。妻子や社会的地位を捨て、命が尽きるまで絵を描く事だけに没頭していく男の名はストリックランド。社会を動かす小さな歯車のひとつでしかない私たち一般人には、痛烈な批判など他人の評価には全く無頓着な彼に対して、ある種の羨望や憧れを抱かずにはいられない。人間のエゴ、見栄、狂気、愛…、多面性と本質をえぐり表現する著者の鋭い観察眼にも着目したい。
17 移動	私はしたい時にくしゃみをする！	『青い城』	モンゴメリ／著 谷 口 由美子／訳	角川文庫	『赤毛のアン』の作者として知られるL・M・モンゴメリのあまり知られていない名作。貧しく慎ましい暮らしの中で、人の顔色を窺いながら過ごしてきた内気な女性ヴァランシー。ある日突然、悲観的だった人生観を変える大きなきっかけが訪れます。後悔のない生き方をしたいと行動を起こしますが…。「幸福とは？」「自分らしさとは？」を問かける痛快なヒューマンドラマ。最後にどんでん返しがあります。読後は気分爽快！
18 下京	本当の強さってなんだろう。	『ローワンと魔法の地図』（『リンの谷のローワン』1）シリーズ既刊5巻	エミリー・ロッダ／作 さくま ゆみこ／訳 佐竹 美保／絵	あすなる書房	ローワンは、内気で臆病だけれども、心の優しい少年。ある日、ローワンの住む村へと流れている川が止まり、人々は困り果てた。原因は、水源がある山にあるはずだと、大人たちの中から勇敢な者たちが向かうことに。しかし、山にはとんでもない危険がひそんでいて、誰も入ったことがない。そこで、村の魔女に力を貸してもらうことになった。ところが、魔女が与えてくれた地図は、ローワンにしか開くことができなくて…。

紹介図書館	キャッチコピー	書名	著者名	出版社	推薦文
19 岩倉	自分自身の道を歩いていきたい！	『ゼバスチアンからの電話』	イリーナ・コルシュノフ／作 石川 素子／訳 吉原 高志／訳	白水社	何でも話し合っていると決めていると思っている父、その父のいいなりの母。娘のザビーネはそんな両親の関係が嫌でたまらない。けれども自分もまた恋人のゼバスチアンといると、相手の思い通りにしてあげよう、彼の都合に合わせてようと、母と同じようにしてしまう。喧嘩をして距離をおいている間、ザビーネの家では様々な変化が…。就職して間もない頃、司書の先輩に薦められて読み、児童文学の素晴らしさを知った本です。
20 向島	「もう読んだ」は、もったいない！	『ダルタニャン物語』全11巻	A.デュマ／著 鈴木 力衛／訳	復刊ドットコム	新聞小説として発表された「ダルタニャン物語」は、あの“三銃士”や“鉄仮面”を含む3部作。実在した田舎出の青年が、フランス宮廷を舞台に政治の中核近くで40年を生きる姿には現代にも通じる「生き様」があります。主人公を待つのはどんな人生か？子ども時代に読んだ児童文学の原作を再読してみませんか。話のその後や、抄訳では語られなかった背景など、大人の眼で新たな名作を発見してください。
21 久我	エデは重要人物です	『モンテ・クリスト伯』全7巻	アレクサンドル・デュマ／作 山内 義雄／訳	岩波文庫	無実の罪で投獄されたエドモン・ダンテス。数奇な運命により、脱獄し、名をモンテ・クリスト伯と改めて、自分を陥れた者たちに復讐を誓う。この物語の面白さは執拗な復讐劇だけではない。毅然としたヒロイン、メルセデス。ミステリアスな雰囲気を持つエデ。魅力的な女性たちが、この物語を単なる復讐劇に終わらせない。映画や簡略版などで、エデが省略されることがあるが、ぜひ完訳版で彼女たちの活躍を読んでほしい。

紹介図書館	キャッチコピー	書名	著者名	出版社	推薦文
1 深草	山は、人だけの領域ではない	『山の靈異記』シリーズ	安曇 潤平／著	KADOKAWA	山に惹かれるのは何故なのでしょう。出会い、景色、体験……日常では味わえないものが、山にはあります。しかしそれは時として、背筋も凍る怪異として非日常をもたらす事もあるのです。生気のない登山者、人の気配のない宿、様子のおかしい同行者。ぞっとするエピソードの数々は、山の妖しい魅力に満ちています。 もしかすると、惹かれているのではなく、呼ばれているのかもしれない。
2 吉祥院	よい夢をみたなというお話	『神様』	川上 弘美／著	中公文庫	夢をみて起きると何であんな夢をみたのだろうか、なんとも不思議な夢だったなあ、でも良かったなあという夢がたまにある。そういうお話がたくさん詰まった感じでもあり、大人の読む日本の昔話という感じでもある。熊と散歩に行く、梨の妖精みたいなホワホワしたのと遊ぶ、死んだ叔父さんが出てくるなど、ありえないけど身近に起こりそうな、読んでいてとても心地よく、どんどん惹きこまれて読んでしまうそんなお話ばかり。
3 久世	遺言をめぐる不思議な友情物語	「ぼくの死体をよろしくたのむ」（『ぼくの死体をよろしくたのむ』収録）	川上 弘美／著	小学館	父は、あたしが15歳の時に自殺した。黒河内瑠莉香（くろこうち・りりか）という女性に「ぼくの死体をよろしくたのむ」という奇妙な遺言を残して。その日から、彼女とあたしの関わりがはじまる。ミステリー作家の彼女は、父の小学校の同級生だったらしい。瑠莉香との交流を通じて、父の弱さ、苦しみを理解する。そして、父のことが好きだった自分に気づく。この世界にあるようなないような、そんな川上弘美の不思議ワールドにはまってみませんか。
4 山科	美味しいミステリーはいかが？	『ヴァン・ショーをあなたに』	近藤 史恵／著	創元クライム・クラブ	下町の小さなフレンチレストラン“ビストロ・パ・マル”の無口なシェフ三舟は、一流の腕で客の舌を満足させるだけでなく、客たちが持ち込む不可解な謎を解き心をつかむ不思議なシェフ。登場人物たちと一緒に一品ずつ味わいながら、謎に考えを巡らす楽しみが詰まっている短編集です。続巻に『タルト・タタンの夢』と『マカロンはマカロン』があります。
5 北	もっと早く出会いたかった先生	『青い鳥』	重松 清／著	新潮文庫	この本は、8編からなる短編小説です。毎話、村内先生という吃音を持った先生が、学校を転々としながら、心が傷ついた生徒、ひとりぼっちの生徒たちを救っていきます。いつでも真剣に向き合い、優しく包み込み癒してくれる村内先生。人の心に寄り添い、大切なことを教えてくれる村内先生。もっと早く出会いたかった村内先生。心に温かく優しい眼差しを感じる小説です。
6 移動	神様だって生きています？！	『すべての神様の十月』	小路 幸也／著	PHP研究所	酔った女性にウィスキーをかけられ、ついうっかり召喚されてしまった死神。人の死を見届けてばかりで「幸せ」を知らないという。死神の幸せとは…？（幸せな死神）イケメン医師と姪の看護師だけに姿が見える和服美人。自らを疫病神と名乗るが何のために患者の傍にいるのか？それはとても意外で優しい理由で…。（疫病神が微笑む）九十九神、貧乏神他、人間に寄り添う神様たちの6つの短篇集。温かい気持ちで満たされる小説です。

紹介図書館	キャッチコピー	書名	著者名	出版社	推薦文
7 洛西	悩んでいるあなたへ	『強運の持ち主』	瀬尾 まいこ／著	文藝春秋	営業の仕事で鍛えた話術を活かし占い師に転身したルイズ吉田のもとに、今日も大人から子どもまで悩みを抱えた人々が訪れます。父と母どちらを選ぶべきか悩む小学生の男の子の話や占いが何度はずれても訪れる女子高生の話、物事の終わりが見えてしまう大学生の話など、どの話も温かく優しい感じがします。疲れているときに読むとほっこりした気持ちになり、また一歩前に進もうと思えるような作品です。
8 向島	びんぼう神様も立派な神様です	『びんぼう神様さま』	高草 洋子／画・文	地湧社	松吉夫婦の家にとりついたびんぼう神は悩みます。「なんでわしは、神様て呼ばれるんじやろう？」それというのも、松吉夫婦がびんぼう神のために神棚を作り、毎日神妙に拝むからです。たとえ暮らし向きは貧乏になっても心は豊かな松吉夫婦と、そんな松吉夫婦に感化され、神様としての自分の役割について悩むびんぼう神。「足るを知る」とは、こういうことなのかなと感じさせられるお話です。
9 中央	伏線回収が爽快！ なSF短編小説	「流星航路」（『緑の草原に…』収録）	田中 芳樹／著	創元SF文庫	貨客船のベテランパイロットの代わりに派遣されてきたのは、実務経験ゼロの少年だった！なぜ彼が選ばれたのか？読んでいくうちに、小さな違和感が大きな確信へと変化を遂げる。そして衝撃のラストへ…。『銀河英雄伝説』や『アルスラーン戦記』で知られる田中芳樹の初期短編小説。これが初期か？！と思わせる、魅力的でどこか懐かしい文章と個性豊かな登場人物に読む手が止まりません。ぜひ手にとってみてください。
10 東山	落語と謎解きのコラボレーション	『ハナシがちがう！』	田中 啓文／著	集英社文庫	ツッパリ少年竜二が、意に反して弟子入りさせられた落語界で奮闘しながら、毎回湧き上がる日常のちょっとした謎を意外な才能で解決してゆく連作短編集です。とにかく登場人物が曲者揃いで、特に竜二の師匠梅寿（ばいじゅ）は、大酒飲みで自分勝手。ところが芸は大天才！そんな破天荒な師匠と弟子の会話は支離滅裂で、笑いが止まりません。大阪弁のテンポが小気味良い、上方落語の入門書としても楽しめる一冊です。
11 下京	簡単そうでいて、 その実複雑	『夢十夜 他二篇』	夏目 漱石／著	岩波文庫	夏目漱石といえば、『吾輩は猫である』や『坊ちゃん』を読んだ方は多いのではないのでしょうか。今から百年も前の時代に書かれているのに読みやすい文章である、というのが漱石の小説の魅力の一つ。「こんな夢を見た」ではじまる短文が十連なった『夢十夜』は、ひとつひとつが独立しているようでいて、つながっているようでもある、不思議な作品。じっくりと漱石の世界にひたって、夢と現実をさまよってみませんか。
12 右中	美しい名画のような4つの物語	『ジヴェルニーの食卓』	原田 マハ／著	集英社	マティス、ドガ、セザンヌ、モネ。4人の画家たちを、近しい人たちの目線で綴った4つの短編。巨匠たちが時代に翻弄されながら、新しい美を生み出していく姿が、丁寧な情景描写によって、まるで彼らの生きた時代へタイムスリップしたかのように、ありありと想像できます。表題作は、モネの名作「睡蓮」誕生に秘められた苦悩と葛藤の日々が、義理の娘の語りで明らかにされます。読後は、表紙の「睡蓮」が全く違って見えるはずー。

紹介図書館	キャッチコピー	書名	著者名	出版社	推薦文
13 伏中	淀川が舞台のありふれた日常	『淀川八景』	藤野 恵美／著	文藝春秋	知っている土地に暮らす人々の話は、情景を想像しながら読めて楽しい。この短編集のように、ありそうな話は特に。ミステリーではなく、ハッピーエンドでもバッドエンドでもない。自分もこういう事があったなあと感じるほどありふれた日常。8話ともまだ続きが知りたくなるいい所で終わっている。是非、在阪テレビ局にドラマ化して欲しい。山本重也さんによる水彩画の表紙も素敵。
14 左京	「力なき傍観者」たちの物語	「悟浄出立」（『悟浄出立』収録）	万城目 学／著	新潮文庫	古典の中の“名脇役”たちを主役に据えた短編集のうち的一篇。脇役である悟浄を、自らを観察者と認める人物として描くことで、古典を別角度でとらえなおした秀作。傍観者であることに悩む悟浄が主体として一步踏み出す様には、ほっと胸が温かくなります。 本作は中島敦の「悟浄歎異」に端を発して書かれたものです。この2作を合わせて読んでみると、きっと古典の世界の広がりを感じられるでしょう。
15 西京	中学最後の半年から始まる青春	「彼女のアリア」（『アーモンド入りチョコレートのワルツ』収録）	森 絵都／著 いせ ひでこ／絵	講談社	中学校の卒業式の朝に見つけた「ごめんね」とだけ書かれた手紙。そこから回想で始まる、不眠症だった「ぼく」が会った「藤谷」という女の子との日々にごいごい引き込まれます。そして冒頭の場面に戻ってから迎える大団円。軽快な、共感しやすい文章により生じる「ぼく」への没入感が、作中の時間でも約半年という短い物語を、とても濃密なものにしています。駆け抜けるような青春の物語をどうぞお楽しみください。
16 醍醐	命に賞賛をこめて一日を生きる	『花のベッドでひるねして』	よしもと ばなな／著	毎日新聞社	海を見下ろす自然豊かな小さな村で、亡くなった祖父が残した宿泊施設B&Bで働きながら幸せな日々を送る幹。幹は、海辺でわかめにくるまれ捨てられていたが、血の繋がらない大平家からたくさんの愛情を受けて育った。ある日、家の裏にある廃墟ビルに明かりが点いて以来、幹の周りで不穏な出来事が立て続けに起こる。両親の交通事故、不気味なウサギの夢、玄関に置かれる謎の丸石…。次第に全ての出来事がひとつに繋がっていく…。
17 醍中	とらねこに会いたくなる一冊	『100万分の1回のねこ』	江國 香織 ほか／著	講談社	佐野洋子の絵本『100万回生きたねこ』をテーマにした13人の作家による短編集。絵本に描かれた、主人公のとらねこがいる表紙がチャームポイントです。私は原作の絵本を読んだことがあります。原作を知らない人でも新しいお話として読むことができます。ねこ好きな人には特におすすめです！ほろりとするお話もあるので、タオルの用意を忘れずに。この本を読み終えると、表紙のとらねこに会いたくなるかも…？
18 久我	どちらが本当の勝者？	「煙草と悪魔」（『奉教人の死』収録）	芥川 龍之介／著	新潮文庫	黄金の国にあこがれた悪魔は人間に化け、宣教師ザビエルとともに入留満として日本にやってきた。ところが実際の日本は天と地ほどの違いが。次第に退屈し始めた悪魔は、こっそり持ち込んだ悪しき植物の種を育てる。ある日、その植物の名を問うた牛商人に“植物の名を当てればこの畑すべてを与える。しかし当たらなければ体と魂をもらおう”と悪魔は答える。この植物の名は？本当の勝者は？

紹介図書館	キャッチコピー	書名	著者名	出版社	推薦文
19 南	毎日がうれしい！ たのしい！	『ミリー・モリー・ マンデーのおはなし』	ジョイス・L・ブリスリー／さく 上条 由美子／やく 菊池 恭子／え	福音館書店	短い髪に短い足に短い服。でも、名前はとっても長い、小さな女の子「ミリー・モリー・マンデー」。そんな女の子が、家族の愛情をいっぱいを受けながら過ごす、なにげない日常のお話です。次から次に頼まれるおつかいや、近所のお店の店番を買って出る彼女の毎日にワクワクしたり、時にはハラハラしたり。自分で読むより読んでもらう方が、想像が広がり楽しめるお話なので、一日一話、子どもに読み聞かせてあげたい短編集です。
20 岩倉	幸せって、もう決まってるもの？	『思いがけない贈り物』	エヴァ・ヘラー／作 ミヒヤエル・ゾーヴァ／絵 平野 卿子／訳	講談社	サンタクロースがプレゼントを配り終わったあと、なぜかひとつだけ残ってしまった人形。誰がもらうはずだったのか、サンタクロースはまだ人形をもらってない女の子を探しまわります。人形なんていらない、もっと他の物が欲しい、という女の子も多くて、少しがっかりしてしまうサンタクロースですが、大切な出会いを信じている女の子がきっとどこかにいるはずなのです。
21 みらい	心温まる笑いと友情の世界	『ふたりはともだち』	アーノルド・ローベル／作 三木 卓／訳	文化出版局	親友である、がまくんとかえるくんの、互いを思いやる絶妙なやり取りが楽しく、ほのぼのとした微笑ましいお話。「おてがみ」では今まで一度ももらったことのない手紙をあてもなくひたすら待ち続けるがまくん。切なく悲しい胸の内を知ったかえるくんが、何とか元気づけようと奔走する姿がいじらしい。二人が織り成す生き生きとしたこどもらしいユーモラスな世界が、優しく幸せな気持ちにさせてくれます。

(令和元年10月作成)